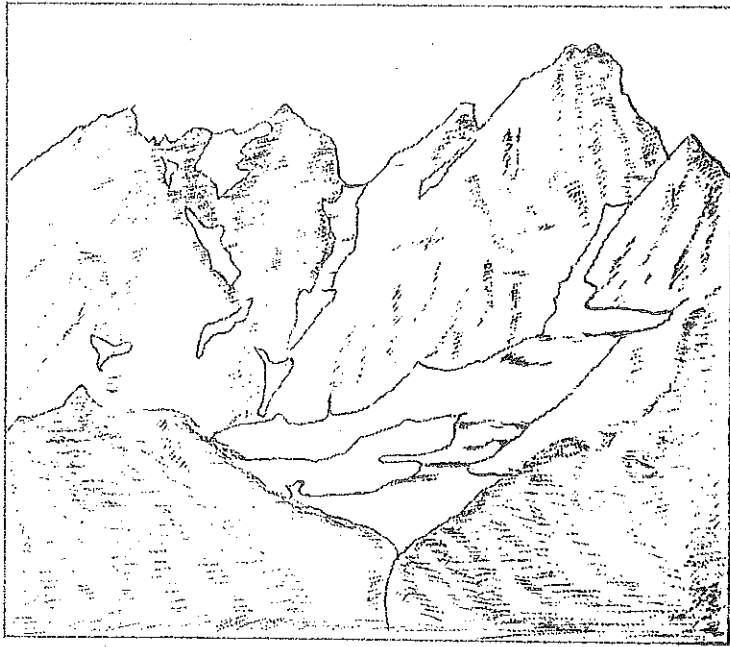


# 西朋 Tourenbericht



新雪の剣岳八ヶ峰上半(池田)

都立西高OB山岳会

V



# リーダーシップの再検討

田中 將利

十月頃の不在中丹沢で時展代をマクシマントがあつた。濃霧で  
こまなかが突発的事件であることは間違いない。

さて登山がスポーツであることは今晩饑が証する迄もなく衆多  
の先輩達によつて囑導されていることである。スポーツとはその  
根柢にシヤシヤと云う絶体的條件が流れて居なければならぬ。  
登山にはこれに附屬して危険が平行する。尚且は更に此所にある  
と尺ねばならない。危険を全く予期出来ずには快楽のみに耽溺する  
場合、危険を正確に判断し、己が信念に立脚したアドヴェンチュ  
アを合理的に難行する場合の二種がある。と云えよう。合理的  
と云うと非常に柔かく感ぜられるのであるが、實際は自然條件直  
びに急の現狀とを考へあわせれば、新人ばかりではなかりーダー  
にとつても放さねばならぬ。練習があまりにも多い。多いからと云  
つて傍観してよいものでは絶対にないのである。ところが就中  
血書を読んで尺で危険を感じたことは、リーダーがパーティーの一  
人一人に対しこころを感ぜて居ないと云うことと云うよ  
りもりーダーがパーティーの多面的な危険と云うものに対して  
りにも先達の前者の態度であり、会員相互間の人間としての感情  
が軟弱しているのではないか。真に山の危険を知るリーダーこそ  
パーティーを貞観に（非人情と思われる迄も）練習するものである。

自然の方がもつとモつと非人間的であることは今更言をまじない  
しごくことこそ夏の感情であると云つても過言ではない。さばか  
りが感情が揺かつたに誤りはない。現在のリーダーの大半が新様で  
あると指摘したい。要は早急に現リーダーがパーティー一人一人に  
対する感情があるのかないのか別然と再認識すべきである。パー  
ティは他人の募集では絶体でない。他人の快楽のみを廻りリーダ  
ーありとせば、我が旗幟の基にどかめるべきでない。居ても居な  
くても改い存在だけでなく居てはまづい存在になるから。命令  
とか山行日録の大なるを以つてリーダーたる資格が得られると考  
えたら大きな誤解と云うべきである。夏の感情がなかつたならば  
より多くの人々が集れまんとする会にとつては単に骨董的存在で  
しがないのである。無題識に事を懸かるといふ様、常に自己の  
信念に立脚して突発的なリーダーが会にとつて必要なのではない  
だろうか。

右に述べた様な事に遇して別きりした信念を持つた今身の卒業  
生の多くが承算多数入会すると廻られるが、彼らに指適されぬ前  
に現リーダーばかりでなく会長全部が今僕の述べた事に対して拙  
文ではあるが函考してもらいたいのである。

\*

\*

# 麻島槍

婦 曰、十一月十二日、十四日

バシテ、L、田中 鉄、佐藤健治

装 備、天幕、ワカン、アイゼン、ピッケル、バーナー、  
（アルコール二。〇。〇。）、ローソク（五本）、シラフ

薬品、その他

公武山行ハケ嶺縦走が「ぼんど雪がない」と云う事で、突然  
麻島槍に変更した。その横新雪の麻島槍は詳しく「岳人」に紹介  
されていたが、問題は十一月中旬の後立山はその年によって、初  
秋から嚴冬の様相を待つ事であった、参加者が二名に減り、荷が  
予想以上に負担になった。そして、ラジウス、ザイル、オーバー  
シューズ、オーバーズボンはとりだして、もたなかりつた。十一月の  
東京は今季最低の寒さが押し寄せ、ラッポは信越・上越・東北の  
猛吹雪を繰り返していた。田中將利以下数名の災送りを受け、準備ど  
新雪を突つた。

「キー曰」

松本（四五八）五〇八）→大町（六七七）→<sup>バス</sup>源波（七三三）

→<sup>トロッコ</sup>大川出合（八三三）<sup>精舎</sup>九一〇）→西沢出合（一〇三〇）→

高千穂平（二二五）→<sup>三二五</sup>→後立横線（五・二五）→冷世小屋（五・

四五）→夕食（八・二五）→就床（一〇・二〇）

大系路線で今日が明け、雲が明け、今日のアルプスに直射

する。全くの快晴である。五更、麻島・爺の銀屏風がその上の月  
と同じ後光をもつて現れる。窓に顔を押しつけて寝むさぼった。

大町駅マイナス二更、二、で今日の同行パーティは名乗り合つた。  
東鉄三野山岳会、山本真氏他一名である。源波でバスを捨て凍り

ついた道に一歩を入れた。昨日の雪が、この辺りから始まる。麻  
島部の手前まで幸いトラックを手に入れた。大川出合の飲場下車

朝食をとり、エンニク入りキャベツ、ツツモ、茶と飯場の女主人  
が迎えにくれた。麻島槍は目の前ほどの雪がものすごい。四人は

期せずしてカメラを向ける。徒はこの玄い大冷沢の河原歩きであ  
る。やがて左岸に上るが、時々河原に降りる。エンテイエ等が一

の沢出合辺りまで飯場と入夫が在る。雪の河原歩きは足が安定し  
ない。やがて西沢を左岸に見て、いよいよ爺岩履履トツキであ

る。死行者の足跡は雪が深くなるにつれて誇いラッセルである。  
この辺りは一尺と二尺の積雪であった。三十分は十分以内の休け

いをもつて歩く。越障以上の冠を履履である。アナが多く、両側  
が蒸か落ちてくるせいか、秋父のトサカ履履の感じがする。ピツ

子の緩い杖々（ニハ）であったが、四人は「頑張りましょう」と皆  
に同じ行動をこつた。シクザクが北側にくると雪がえらく深い。

高千穂平の山頂で麻火山岳部斉藤氏他一名に逢いついた。一人  
は相当疲弊している様である。やがて限鉄、我々、京大と続いて

高千穂平に到着した。全くの快晴はそのまじである。近くは爺岩  
飯屋帳、サイクルト履履、横線に上る雲道と全てが驚愕によって

始まる。遠く斎場の煙りも、ハケ岳も、南マモ富士も其々其もこ

の天候に満足しているかの様は解がある、前途を種々の條件から判断して、我々は重い天幕(三層三層)をこの場に張した、ラッセルはひびきまで凍する、小さなコブを五つほど越して最後の急登に降りた、全く予期しなかつた難場である。氷溜はヤブザブに凝る、約七十度の斜面であるが、これは約二十度の雪をかぶっている、一時約三十分程を費してトラバースして下らざる者、直登する者と、放射式に登り切った、敢て蒸騰く、肩の稜線に黒部側から雪煙がおり上つている、こゝで佐藤と大隊が掛り凍れ左のぞ、難場、トラバースルート及び小屋への先行を東隊脚にまかせた、小屋二と近く、紐をたかまきであつたが、すどは暗くなった、この場所を夜に覆われた、こゝに詳しい山本氏の先行とラッセルが私を勇気づける様である、すつと覆れる所大隊をばげまし、小屋に急いだ、雪煙をまじもは覆けて顔面が凍りついたのではないかと錯覚する、約十五分後、小屋の明りに迎えられ、直ちに懐中電燈をもつて大隊へ迎えに出た、雪に半ばうずもれた冷たい小屋に大が顔合せた時は火がよく燃え「静かな静かでした」と掛け合う声が明るかつた、

小屋は炊事場、寝間はかなり雪が吹きつけられていたが、小屋の部屋はしめてすらない、厚い氷りを割つて氷の便もついた、異常な大きな月が香水湖の上にホツカリ上つた、兎がどころ中でおどろ出した、だが興えない、腹が餓を食べ乾燥も終つて、十時三十分シラフにもぐつた、外は碇向の様に明るく自然は静まりかえつていた。

「オニ」

起床(四・二五)―朝食(五・三〇)―出発(六・〇〇)吹雪激しく直ちに引返す、再出発(八・〇〇)―折引山(九・三〇)―赤島嶺(一〇・二〇)―(一〇・三〇)―小屋(十一・五五)十二時十五分田中腹痛の爲帰る、一在藤就旅(八・〇〇)

慶山シーパンも終つた頃、小屋の主人等がせつせと切り出してくれたのである、等しい寸法に切られた薪は今日の我々にも事欠かない、寒さもさほど感じず、かき食事も思つた、に出承てゆくのである、最低温度はマイナス五、六度であろうか、しかし天候は昨夜の名目にも裏切られた如く、いわゆる自然の冠戴の驕台である。

吹雪の中を東隊と出たが、たちまちにして引返した、彼等東隊は勤務の都合で一たん整備し直すや、ヤツケの輿に顔をつめて降つていた、そのあと彼等の足跡を消してゆくのも自然の趣意であつた、八時―雪は止み、履音がきいてきた、「出よう」この時を待ちこがれていた我々は期せずして罷出した、刃ばかりは合致らず、寒い、ラッセルも一尺ほど凍り出だした、刃ばかりは引山手前の即ち徑を部側に垂れ下りた腰までもある、

稜線に出ると丁度ナイゲルに滴したウラストど歩き易い、吹上げる刃は稜上附近に猛烈な雪煙をあげ、部側の岩壁はその黒い岩を突々とのどかせている、全くひらけた遠景は剣、立山、赤沢、蘆華に自由自在の感があつた、吹き飛ばされるのではないかと燃う不安に又ぞしてすぐにナイゲルをグッヒとして足をおんばる、

その脚底「すごいな」とどちらかが言う、とにかく、さんざん尻に構まされたら、頂上を歩いた。感激の余り握手を交した身体が、アナイと不安にちのつく瞬間でもあった。三角奥にすがりついて尻の方から写真をとる。

帰路も又登りと下つて顔を見評側に向けねばならず、巻上る尻雪に泣ッラの態ではあつたが、目的を果した神経が感覚の鼻の穴にまでゆくみぎ与えた。カンパンを食べながら降る足も、リズムカルに小屋へ戻った。降臨、山中は膝痛を訴え別處に降りて後も同じ様な状態であつたが、首腹の気配ありと京大斎藤氏の診察を受け、之はわかには病弱く、雪で冷し下ら回復を待たせ、しかし猶々悪く藍色の冷感小屋には思わぬ不安が訪れ斎藤氏はあうゆる手を付くした。

八時近くいつともなしに止んだら、メキ差に全てを説いてミラフに身をうすめた。

「オ三田」

萩床(五〇〇)朝食(六〇〇)出登(八〇五)高千穂平(八五〇)西沢出合(八二五)大川出合(八二二)大町教舎(三二〇)大町駅(三三三)松本。

おぞるおぞる眼をさましたものであるが、田中の痛みはとうにか止まったとの事である。雪い大雪を荷った三人は久し振りの笑顔で語り合つた。尻こき雪いが快膺である。苦痛からさめて飛出した観世帯が何とまがしい事だろ。張いニ中の織尾路はキラキ

と高く低く続いてゆく。中ごも目的の麻尾槍と一つへだてた劔は歪巻である。

オジヤヒリンギを食つて降路の腹はすつかり出来た。すつかりお世話になつた京大氏と別れて川屋谷後にする。一昨曰として昨日のラッセルの跡形もなかく載どつたが身体は軽い。

オ三田曰、卓上で計画された麻尾槍と云う雄美な山が我々を迎え、我々を選してくるところである。真白い雪鳥が未だかたい木の芽をついて目をくるくるさせている。三日前の新雪もめつきり消えて赤岩尾根を一氣にかけ降りた。大川出合でオートバイを捨て、冬支度にはしがれしい山村をスツ健んだ。核ばかりの林と、カブだけの田んぼともアデューして。

### 凍傷について

鈴木輝夫

冬山で最も多く起る凍傷に就いて再認識する意味に於いて考へて見よう。

寒冷によつて手足の皮膚温が低下して約摄氏一。度以下に達した頃、局所に強い疼痛が現れ、血管反応が現れて赤るが、血管反応が弱いか、又は寒冷が強いと皮膚温が低下し、遂に皮膚の感覚は麻痺してしまふ。そして零下五度以下に達した頃、何か局所を強く棒づいた様な感じを生ずると共に局所がほのりに白く氷つて来る。これが凍むと段々氷が固くなり、白化する部が拡がつて来る。これが凍傷の初期症状でこの状態だけでは凍傷の程度は

の程度が異なれば、その準備状態である。所が其後凍瘡が融解する様になると本格的な凍傷の症状が現れる。



に腫う。包し失。紫少左。暗く黄。冷くつ感。冷なれ。

必ず程度の弱い凍傷であった場合にはその融解後に漸次に局所に発赤が現れて熱くなり、腫れ上つて皮膚表面がチカチカ痺いのがオ一度で、この程度なる局所に油薬を塗つて痒みを防ぎ、十回もすれば大した事もなく治つてしまふ。程度がもう少し強くなるに水疱が出来て痛みや腫れ方も一層強い、局所の温度はあつたが水疱の部分は冷い。これがオニ度凍傷と云はれるもので、そうなるに余程注意しないと局所が代償して思ひ危険な状態を起す。然置としては水疱内の液を抽出して、その中をマトキヨロカリパノールの様な刺激の弱い消毒薬で洗い縛縛せしめておく。ニ三週間もすると皮膚が乾いて剥げ、新しい皮膚が出来て治つてしまふ。所が更に凍傷の程度が強いと厄介な事になる。これはオ一凍傷が融解した後も局所の温度が回復しないのである。そして局所は若干は腫れ上がるが、赤味や青味を帯び、局所が冷く温度がない。これがオ三度凍傷と云はれるものである。この場合には凍傷部が全部三度になつて了う事は稀で、健康部との境目はオニ度とオ一度の部分が残つてゐるからその部の疼痛感もある筈で

ある。このオ三度凍傷になると必ず局所が腐つて来る。その腐り方も局所がミイラの様に乾枯びて腐るので代換してくられるのとはかなり異なる。局所の温度が必置で約ニヶ月以上はかかる。

この様な凍傷になると素人治療は弊害であつて必ず医師の御介にならなければだめである。さもないとこじれて全身症状を起し、死の危険を伴う事さえある。要するに凍傷にひつて一番恐ろしいのはオ三度凍傷であるが、併し手当の仕方によつてこの様なひどい症状を起さなくとも済むのである。オ一に手足をぬらさぬ事。露い所に当てる事。金属等を握らぬ事。そして其他これに類して手袋とか靴についでこの注意も必置である。

そして次に大切なのは、人体の元来持つてゐる凍結防禦力を極度に発現させ、やるによい。皮膚が冷えて凍瘡が起れる様になると凍傷の危険が迫つた事が警告させられてゐるのであるから、早早手足を暖めてやるとか、授存、存続等によつて血脈の反応を促進してやるのである。

又全身を暖めると局所の防御反応も感んになり又局所の凍瘡血脈反応は一層顕著に表れる傾向がある。

オニは凍結の起つた時の処置の事であるが、これに就いては従来大変誤つた方法がとられていた。それはどの本を興ても、又大抵の医者に聞いてみても凍結した局所は必ず奪離して、赤味が出てから局所を漸次暖める様に述べてゐる。若しこれに反して早くから暖めると凍瘡が悪化してオ三度になるとまどおしつめた

のである。これが大変まちがっているのである。

その方法は一口に云えば出来るだけ速やかに肩所を暖めて一氣に凍結をとかし、肩所に血液循環をつけてやる事である。一番よいのは微温湯に凍結部をすつかりつけて、三十分位肩所を湯の中に入れて暖めてやる事です。が、それが出来ぬ時は、指をうば口の中に入れて凍結をとかしてやつてもよい。又口に入らぬ様なものは、誰かにすく尿をしてもうつてそれが暖い内に肩所を尿中にすつぱりつけてとかす。それも不可能ならば凍結したものをそのまま大切に融かさない様に保存しておいて、湯をわかしてその後凍結をとかすのである。下手に摩擦だとか気温上昇に伴つて徐々にとかすよりも少々凝れてもよいから湯でとかす事が大切である。それはこの方法の良い所は凍結を一氣にとりし切つてしまふ所にある。ぐずぐずととかして行くといけなものである。又凍結を融かす温度も三〇―四〇度位がよいので四五度以上の湯になると凍結の融けた後ぞ熱傷を来すから反つていけな。この様に凍結がとけた後は直ちに肩所をよく拭つて乾燥した繻帯又は布でよく巻き保温して再び凍結を起さぬ様に注意しなければならぬ。この様にする事によつて才三度凍傷はどんなに強い凍結が起つても必ず防ぐ事が出来。才一度又は才二度に止る。又才一度才二度になるべきものも、その程度が大変速やかであつて早く治る。最後に何故この方法が良いか簡単に説明すると、才米才三度凍傷は凍結部の血液が融けた時に血液凝固が起つて、血管をつまみこまつて血液の循環をとめてしまふ為には、その支配下の組織が腐つ

て来る事にある。それ故に凍結のとけた時に一氣に血液循環を感じてこれに凝固しないうちに血管の中に新しい血液を入れて衰性した血液を流してしまふのである。當つて日本の陸軍でも極地―滿洲―でこの方法を採用して好成績を改めたと聞いてい

### 備品に就いて

環遊会には

ハンマー	4
カラピナ	1
ハーケン	18
ランタン	1
ザイル(30m)	1
穂高岳	

算がある。便用され度い方は器具部山口氏の所迄申込み度い。なほ、便用後は速やかに器具部に返却され度い。

去る一月三十一日、会ではプリムスの中野ヲチウスを講入した。價格、四千円でした。



# 雲取山

十一月六日—七日

P.平沢(ヘレ)、夏崎、岩崎、伊藤、龜山

## 六日 曇り

予定時間より一時間の大遅刻と云う次第を私がとつてしまつたので、戻送りの中に立川を出發したのが五時四十五分、永川にて遅よく終バスに間に合い、川野迄行き、途中で買物をしたりして十時前後鴨沢に着く。そこぞ三六〇度のトレーニングなるものを為て、途中農家で夜飯をとり月のない夜道をのんびりに行く。やたらに寒い、煙が目にしみるのではなく寒さが身にしみるのである。

セツ石前で早や我が祖先「龜」の本性が現れて、後に続く人には氣の毒とは短いながらも岩崎さんとの間が三米、五米と離れて行く。やがて小屋流ぐニ、三のパーティーに追いつたりして居る内に一時五の分小屋に着き、その日は終つた。

## 七日 曇り

モーニングパーティー・彼のパーティーより一時間程遅れが長い。七時三〇分、朝のおわただしい気分の中に別れを上げ頂上に行く。ふいにぐがすが出ていて更晴しはきかず、期待した気分は零・それと頂上の汚いこと、早々に引上げ幅の下りた赤土の山肌はスベリそろなのでヒヤヒヤしながら下りる。帰路は産松谷、落

葉のモウセンをかんでのんびりと下り二時間の豪華な中食を摂つて、蒸気谷の山倉へ、出合からはパリックとした道程。この日は早飯才二回戦、短い間に順をめぐらし結果如何と曰系へ送ぐ。

# 守門岳

期 日 十一月二十三日

パーティー L、平沢、豊時、福田

## 時間記録

リーダー会で冬山の対称に茂草岳が選ばれたので、その偵察と守門岳登頂を目途とした。先ず、横塚の方であるが、大白川村の大丸屋旅館の山小屋に於けると、附近にスキー場はなく、積雪は一日で二米位溜りは三食四百五十坪ほどのことであつた。守門へ登る途中見附したところも大体同様で、一応守門岳頂のスキーは不適と見た。

次に守門岳・地図上の路は不明で、守門には西面から登るのが一般なので、その故か崖根に取つて廻らしいものもない。

結局崖根の左側の枝展根にやがた瀟々として取つたが、相当のアルバイトだつた。稜線は割合やせこいで傾斜も急であるから、雪がついてフラスコしたりしたら面白いことになるかも知れない。雪は頂上附近で一尺程あつた。

雪原岳方面はがすのため展望出せず、傾斜をすることは出来なかつた。

ラ・モレーヌ

九月	十二日	入川谷	田中将利
〃	十三日	ウツラ岩	福田
〃	十三日	南ア	田中(将)
〃	十三日	上高地	平沢
〃	十三日	鹿地谷	山中
〃	十三日	川苔山	佐藤
〃	十三日	八ヶ岳	松田
〃	十三日	キノハ沢	鈴木・山中
〃	十三日	御岳(早大)	田中(将)、平沢
〃	十三日	仏次郎	福田
〃	十三日	日入ヶ岳	鈴木・佐藤
〃	十三日	北嶽谷	西本
〃	十三日	武甲信岳	加藤
〃	十三日	川苔山	岩波
〃	十三日	守門岳	平沢、窪田、福田
〃	十三日	川苔山	山口
〃	十三日	徳州峠	西本
〃	十三日	巖取山	平沢、長嶋、岩崎、亀山、伊藤
〃	十三日	鳳凰三山	山口
〃	十三日	表尾根三峰	松田
〃	十三日	御前馬腹山	佐藤

十四	十三日	鹿地谷	田中(将)佐藤
〃	十三日	巖取山	田中(将)
〃	十三日	川苔山	西本
〃	十三日	馬士山	田中(将)鈴木

ゴシップ

TSF三人が松本で一人さびしく病院に入院中のM・Tと買辦に行つた帰り、行きはバスだから電車で帰ろうと意気が一致、歩くうちに川にぶつちつたが橋ははるかかなたの上流と下流にあるのみ、そこでどっちにゆくべきかと観察していると、向うから河童作然としたッオツサンが自轎車に乗つてやつて来たのだ。丁が尾づねて行く。

「あの橋はどっちに行くんですか」  
 オツサン「橋は向うにわたるためにあるんだが」  
 愛山の帰りの話である。

春期山行計画

春の山行は次の如く決定

- 一 八方尾根(磨松岳) 三月三十、三十一日 係、山口雄弘
  - 一 八ヶ岳 三月三十一日、四月一日 係、田中 実
- なほバケ岳行には冬山技術の基礎一般を練習するに足るべく全員の参加を望む。

# 西朋登高会会則

(一九五三年四月二日発効)  
(一九五五年四月一日改正)

## 第一章 名称及び構成

第一条 本会は西朋登高会と称し、柳井西高野道修、松本繁雄、佐藤茂を以て橋渡し、事務局を東京都中野区大塚町一八〇番地、田中方に置く。

## 第二章 目的及び事業

第二条 本会はスポート、アルピニズムを遊樂し、山行実践を以て会員相互の生活向上を目的とし、併せて柳井西高等学校山岳部正統的指導を行う。

第三条 第二条に基づき山行、療養、会報発行を行う。

## 第三章 会 員

第四条 本会は正会員及び会費よりなる。

第五条 正会員は入会後二ヶ月以上にしてリーダー会に於て精神的技術助の会の主体たるに足ると認められた者を以て、

第六条 会費は会の規定する入会手続を完了した者を会費として認める。

## 第四章 役 員

第七条 役員は正会員中選出され、任期は一年とし四月一日より三月三十一日迄とする。

前任はこれを認める。

第八条 会の代表として会長一名を置く。

第九条

会長は全会員の投票により正会員中より選出される。会長は会の運営全般を統括し、委員としてチーフ・リーダー一名及び会計係、審判係、庶務係各一名を任免する。

第十条

チーフ・リーダーは山行に関する最高責任者にして専ら一線会員を統括する。

第十一条

会計係は会の会計を司る。

第十二条

審判係は会の器具を司る。

第十三条

庶務係は会務全般を司る。必要に及び補佐若干名を任免出来る。

第十四条

年次一線会員は正会員中に於て年度の主たる者をこれと認め、会の山行に關する決定権を有する。

第十五条

本会として総会、月例集會、委員会、リーダー会を定め必要に及びその他の集會を行う。

第十六条

総会は毎年四月に行い、役員を交代する。

第十七条

月例集會は毎月一回行う。

第十八条

委員会は会長チーフ・リーダー及び委員より成る会の運営最高審議機関にして必要に及び会長が招集する。

第十九条

リーダー会はチーフ・リーダー及び年次一線会員より成る山行運営審議機関にして必要に及びチーフ・リーダーがこれを招集する。

尚正会員の出席を認め難きを許可する。

第六章 会 費

第十九条 会の運営を円滑ならしむるため会費を次の如く定める。

一 入会金 作百円

二 会 費 四百円

当特別の事情ある場合は委員会からの認可によりこれを免  
除される。

第七章 罷 免

第二十条 次の各項の行為ありたる場合委員会に於て処分される  
ことがある。

一 会の名譽を毀損せる時

二 会費を三ヶ月以上滞納せる時

三 会の統制を亂した時

第八章 会則及び役員の変更

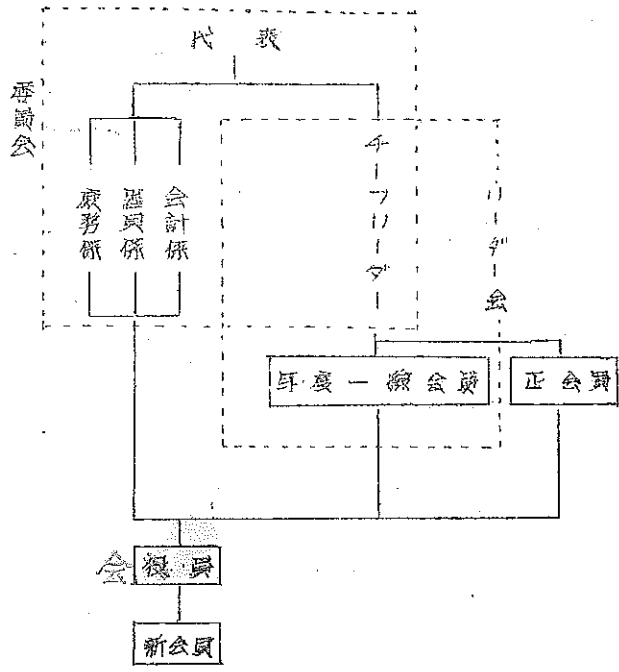
第二十一条 本会則の変更は総会に於て出席者の三分の二以上の賛  
成を得た場合委員会に於て審議し決定する。

第二十二条 会長は席会に於て新会員を除く出席者の三分の二以上  
の賛成を得た場合これを変更することが出来る。

役員の変更は委員会又はリーダー会に於て会長又はチ  
ーフ・リーダーが決定する。

以 上

西 朋 登 高 会 構 成



西朋報告 才五号

発行日 昭和卅年三月廿日

編集者 田中將利

発行所 西朋登高会

(中野区大和町一八〇田中古)

